

難敵！

シラミと靴マメ！

京都府 佐 金 謙 治

私は、大正十三（一九二四）年二月二日、京都府綾部市八津合町日置村中で生まれました。

昭和十九（一九四四）年九月二十日、京都伏見の歩兵連隊第三十七部隊へ現役入隊しました。入隊当時の私の家庭については

父及び母 健在 農業

長男 若くして死亡

次男（本人） 健在

徴用され舞鶴の第三火薬廠へ

勤務

本人の妻 健在 父が病弱のため、昭和

十八年初め、本人が徴用され

る前に結婚していた

弟（三男）妹三人 全員学童

という状態で豊かな家庭ではなく、苦しい方でした。が当時の戦局は既に敗戦の色濃く、壮健な適齢期の若者として、自ら志願までして困難に赴く者の多い世相のもと、徴兵検査に合格して、君国のため軍務に服すことは、日本男子の本懐これに過ぎずと勇躍して現役入営したものでした。

昭和十九年九月二十日でした。九月二十八日京都出発、九州の博多へ。内地の屯営在隊は十日間にも足らぬ短い日数でした。その間は、注射（戦地へ出るため病氣予防のため）、被服類、食糧類の受領、その他雑務で多忙の連続でアツという間に過ぎました。軍隊特有のビンタをはじめ制裁もなく、何か拍子抜けの感もありました。ただ起居動作の間に、軍隊のシッケとして姿勢、発声その他の教育訓練は口やかましかったです。

昭和十九年九月二十八日、伏見の母隊出発。父親が独り見送りに来て、ソラ豆の炒ったのを一袋

渡してくれました。有蓋貨車輸送で博多へ。御用船に乗り込む。対空、対潜の警戒監視も不馴れの内釜山へ。有蓋貨車に乗り替えて朝鮮半島を縦断、満州経過で山海関を通過、北支へ。

昭和十九年十月、済南へ到着、下車。伏見より済南まで部隊輸送の間は特別なこともなく、無事平穩に経過してヤレヤレでした。

済南よりショウガ（地理も漢字も不明）へ向けて、トラック輸送。大陸の黄塵万丈の中を進行。全身真黄色になってショウガに着きました。ここで約二カ月間の野戦教育を受けました。内務班では内地では無かった連帯責任、ビンタ等あり気合を入れられる。徐々に鍛えられて一人前に成長してゆく。

新兵教育が終わると、南方の湘桂作戦に参加、勇戦中の原隊の嵐部隊への追及が始まった。この追及移動が最大の労苦の話題となった。

第一次はショウガより南京を経て、安慶まで列車と船で輸送され、まあまあ安楽な旅である。移

動とは言え、兵站や乗船の都合のためか、南京その他の都市では見物、観光もできて有り難かった。

第二次は安慶より漢口まで徒歩行軍であった。

これが問題であった。まず食糧は安定されていて問題外。労苦の種となったのはシラミである。全員が体中全部にシラミがわいて被服にはタマゴがびっしりとついている。昼食の大休止に帽子の内側より額に沿ってポロポロと落ちてくる。缶詰の空き缶に大休止中にいっぱいになる位シラミの死骸ができる。嘘や作り話ではない。本当にあったこと。

そのうちに日数を重ねていると、体質の弱い者の数人の皮膚が荒れてくる。ひどいのは松の木の下幹のように人の肌とは言えないようになる。もう堪らない状態になって、衛生兵に見せて相談する。衛生兵はもうビックリして呆れて「こんなひどくなるまでに、どうしてもっと早く見せんのぞ。もうこんなになっては処置なし」とメイ

ファーズ（仕方なし）である。その内に日数の経過と共に、どうにもならなくなって無残にも病死した者が数人になった。

病死はせぬが、一步手前、二步手前の重症者や中症、軽症者は数知れず。これが部隊では重要問題となつて、熱湯煮沸消毒による衣類の処置のため行軍も数日遅延した。

私共は大陸戦線を東奔西走したが、事実上敵との撃ち合いの実戦経験がない。そして戦死者もない。なのにシラミの害による病死または病兵の出たことは、内地や戦地の駐屯地では無想もしない被害というか、こういう難敵と戦つて苦しんだと言ふ異常な労苦物語の体験をした。高熱と衰弱とに苦しんだマラリア以上の難病でした。

それともう一つの労苦は靴を履くための足のマメであつた。毎日毎日の徒步行軍の連続である。マメの二つや三つはもの数の数には入らない。マメの治療法と言へば、針に糸を通して糸にタツプリとヨーチンを浸して、マメの中をスーッと糸を通

す。夕方に治療しておけば、翌朝には治つてゐる。不潔な靴下をはいて靴の中でシワを作つたり、また靴の中へ米を入れてあつたのをはくと、まれには靴下の中に米粒が若干残つていて、行軍中その米粒でマメになる例もあつた由。

マメの中にマメができる例もあつた。そのため歩いて行軍ができぬ。銃や背囊袋、鉄カブト等を元氣な戦友が代りに持つてやり、本人は身軽くなつてヒョロヒョロとビッコを引きながら行く。特に悪化した者の靴を脱がせて靴下も除き、裸の足にしてみると、皮膚が破れて肉に穴があき奥に骨が覗いているという重症もあつた。もう精も根も尽き果てて、携行用の手榴弾で自爆した悲惨な者も出てくる。

落伍して部隊より取り残されて独りになると、残敵や便衣隊の餌食になり、身ぐるみはがされて、裸の死体が路上に転がっていると云う結末になる。決して落伍はできない。マラリア、下痢その他の疾病もあつたが、これは少数で大きな話題

にはならなかった。

長い行軍であったが、夜間行軍である。昼間は敵の空軍が制空権を握っているので、行軍できない。昼は人家や森林の中に隠れている。行軍の距離も伸びない。また食事のため米を洗って炊飯する。大陸の黄色いにごり水しかない。内地ではシラミ、マメ、マラリア、病気、水、その他考えられない悪条件の重なり合った中ででの生活、というより生存であった。

戦後に生まれた若い、戦争中の労苦を知らない国民に、このような昔のことを言っても十分な理解ができるであろうか？ 日本の国の将来を考えると、このままの平和ボケでよいのかと不安になる。

昭和二十年九月の終戦後、馬受領に部隊全員が編入され、河南省の奥地で蒋介石軍に抑留された。

昭和二十一年四月、内地帰還のため上海到着。

上海港より博多へ。上陸復員帰郷する。

帰宅後は農業をやって現在に至っている。復員後生まれた子供は女の児ばかりで四人。孫は八人恵まれ、私共老夫婦はじめ全員健在です。

終わりに、支那大陸まで出征して、無事に命あつて生還できましたが、実戦に参加する機会に恵まれず、「シラミやマメ」との戦いという労苦ばなしです。

従軍記（一）

湘桂作戦を追及して

石川県 村井藤一

入隊

十九歳の頃、私は舞鶴海軍工廠に勤務中に肋膜炎になり、工廠を解雇されて家業の万頭屋を手伝っていた。この年、徴兵検査で視力が、〇・〇八で第二乙種合格だった（甲種でも、乙種でも合